

四国遍路とくらべましてもほぼ同じかそれよりも多い人たち、かなりの人たちが熊野に行ったというように理解した方がよいのではないかというように思います。以上、とりとめもないですが、この四点ないし五点の問題を私のコメントにさせていただきます。

## コメント2

塚 本 明 (三重大学人文学部教授)

コメントを頂き、ありがとうございます。できる範囲で答えさせていただきます。

まずはお褒めの言葉を頂きまして、大変恐縮しております。リップサービスだということは重々承知しておりますが、私の手柄ではなくて史料が良かったからこういう話ができたのだろうという点は、全く仰る通りでございます。ただ、良い史料を見出せたのは私の力だけではなく、地域に入って調査し、地元の人たちと一緒にやった成果である訳です。その点をお話したことで、先ほど今治の越智さんのお宅にある納札の報告書を出したいと仰って頂きまして、それだけでも今日来て良かったなと思っております。ありがとうございます。

さて、まず善根宿納札の時期についてですが、文政年間の1820年くらいのものが一番古い納札です。下限は、善根宿をやっていたご当主、おそらく2代にわたったと思われませんが、その2代目のご当主が明治12(1879)年に亡くなりまして、善根宿の納札としては基本的にそれまでということになります。昭和期に至るまでの御札類が若干含まれますが、まとまった量の納札は19世紀前期から明治10年代までとなります。ですから、先ほどのお話では省略いたしました。木製の納札は17世紀から幕末までとかなり年代は幅広く、対して善根宿の納札は江戸時代後期以降に限定されており、この時期差の持つ意味については、今後もう少し詰めていかなければならないかもしれません。

次に往来手形の問題ですが、この点は私も気になってはおりました。ただ、そもそも往来手形は村が出したり寺が出したりしていますし、人によっては2つセットで持っている場合もあります。ご指摘頂いた死後に故郷への連絡を不要とする文言については、寺と村の両方で往来手形が出されるようになってからだと考えておりますが、実際にはその文言通り執り行われていたとは限りません。尾鷲組の大庄屋文書のなかには、死んだ場合に出身地に知らせる必要なく葬ってくれという往来手形の文言がありながら、わざわざ故郷へ連絡している事例がいくつも見られます。それはなぜか、多少意地の悪い見方をしますと、葬ったことを連絡すれば、故郷からお礼のお金が来ることがあり、それを当てにしたという面もあったと思います。

また、旅先で死んだ場合に往来手形を必要とするのは、かなり強い縛り、条件であったようです。ある時に巡礼者一行のうち1人が尾鷲で死んでしまいましたが、彼らは往来手形を持っていませんでした。残りの人間を尾鷲に留めたままで代表者が一旦故郷に帰り、往来手形を貰って尾鷲に再び戻って来るということがありました。ですから、行き倒れた者を埋葬する時に往来手形が必要であるという原則は非常に強かったのではないかと思います。私は、内田先生が仰るような往来手形の文言によって旅人と地元とが切れてしまうという御指摘については、必ずしもそうではないと考えております。ただ、先ほどご紹介頂いた小松の会所日記の記載は大変興味深いものですので、私も今後注目してみたいと思います。大坂町奉行所のお話は、聞いたことがあるような気がしますが、ともかく往来手形の問題の難しさは、制度、形式が領主ごとで異なっており、領主が違う旅先では様々な問題が生じる可能性が高かった、ということだろうと思います。

それから、伊予の単身女性の出産事例や吹上村の事例などに関しての、労働力の問題です。さんと幼い娘のきくが吹上村に引き取られたのは、もちろん史料に記されるようにさんが働き者で村人に好かれたためではありますが、同時に吹上村の方で労働力を必要としていたからというのは、十分あり得ることです。吹上村というのは街道沿いに面していて、非常に経済が活発なところでありました。

この一件についての藩同士のやり取り記録は多少残っております。この女性たちは寄る辺のない境遇で、尾鷲に帰っても受け入れる親族あるいは家がない訳です。そういう事情もありまして、尾鷲組の方でも吹上村に人別を送っても良いと判断した上で、紀州藩の了解を得て送っています。

尾鷲で出産した女性がなぜ偽りの地名を記したのか、この問題については推測の域を出ないのですが、恐らくは身ごもった過程の話など、身元をすべて話すわけにはいかない事情があったということでしょう。また、尾鷲の算用記録に記載してある地名で、場所を特定できないものが結構存在します。出身地について、国や郡まではともかく、村名はかなり怪しいのです。先ほどは詳しくは説明致しませんでしたでしたが、どうやら地名は、旅人から口頭で聞き取って記載しているようでして、宛て字だったり聞き間違いなどからか、該当する村を見付けられないものが少なくありません。それだけではなく、明らかに虚偽で、存在しない地名というものもありました。あてどなく巡り続ける人たちは、出自を隠して旅をしている、そういったことも原因ではないかと考えております。

熊野街道の利用のされ方についてですが、お話しでは少し単純化して、基本的に伊勢から西国巡礼に向かう人たちが利用したということを示しました。比率としては少ないですが、もちろん熊野参詣の者がいたことは確かです。大枠でいいますと、中世の公家たちを中心とした熊野参詣の文化から江戸時代には庶民を中心とした伊勢参りの旅文化に転換したととらえております。なぜ近世以降に熊野参詣が衰退してしまったかということに関しましては、熊野三山というのは修験の地で、山伏たちが活動した場所です。ここを紀州藩が宗教的に弾圧、抑圧した影響が大きかったのではないかと考えております。また、熊野の比丘尼たち、あるいは御師たちと、伊勢神宮の御師たちとの一種の縄張り争いがあり、それに熊野は破れた、言うなれば熊野のシステムを伊勢神宮が奪ったようなものですが、そのような構図があったというようにも考えております。

そうは申しながら、実際にはご指摘の通り、熊野信仰は江戸時代に各地に広がります。特に福島の会津地方には熊野神社がたくさんあり、そうした地には熊野街道を通った西国巡礼の道中記がたくさん残っています。熊野神社の分布とその地の西国巡礼文化とは一定の相関関係があり、そうした地の人たちは、西国巡礼に際しても熊野三山参詣を意識したのではないかと思います。そういう観点で、熊野信仰の地域的な広がりや西国巡礼との結びつきも考えていかねばならないだろうと思っております。

最後に、紹介頂いた四国遍路の巡礼者数についてはよくわかりました。この数と熊野参詣の数が重なるのではないかとのご指摘は、とても心強いものでした。ありがとうございました。